

## < 高等学校「歴史探求」に活かすグローバルヒストリーと対馬の繋がり >

研究年度 令和4年度  
 研究期間 令和3年度～令和5年度  
 研究代表者名 松尾晋一  
 共同研究者名 山田健太郎  
 山口華代

### はじめに

本研究の目的は、世界史レベルの対馬の歴史を掘り起こし、それを歴史教育の現場で実践する教育教材開発を行うことである。

高校新学習指導要領によって「日本史」「世界史」は「日本史探求」「世界史探求」へと変わり、生徒が「考える」ことが学びの大きな柱となった。ただ、学ぶ生徒にとって歴史は、身近なものではなく、一方的に「考えろ」と言われても取っつきにくいと感じる割合が高いと思われる。この点は、身近な地域の歴史との結びつきがあれば少し解消できる課題であることから、その効果の検証を目的とする。

本年度は教育素材となる対馬の歴史と関係遺産の確認と、学外での探求型授業の歴史学習の場となる施設（博物館・資料館）の現状把握を試みた。

### 研究内容

#### 1. 教育素材となる対馬の歴史と関係遺産の確認

対馬は日本列島と朝鮮半島との間、そして日本海と東シナ海の間位置する。そのため、日本史という括りではなく、アジア史、あるいは世界史といった範疇とも関わる歴史の舞台になった。現在も時代を問わず関係遺跡や遺物が多く島内外に多く残る。このなかでも探求科目の教育素材となる資源の歴史的な検証を試みた。具体的には、対馬歴史研究センター所蔵の史料を用いて18世紀後半に中国大陸で起きた太平天国の情報に関する分析を行った。

#### 2. 学外での歴史学習の場となる施設（博物館・資料館）の現状把握

##### ○対馬博物館ヒヤリング調査

2022年4月に対馬博物館が開館した。この施設には長崎県所管の長崎対馬歴史研究センターと対馬市が所管する対馬博物館が同居する。前者は長崎県が所有する対馬宗家文書などを保存管理するもので、後者は対馬市が所蔵する資料（自然科学分野も含む）を所蔵し、展示、教育普及を行う。開館間もない施設の現状と課題をするためにヒヤリング調査を行った（同年12月2日）。ヒヤリング調査にあたっては、施設と地域の関係を両館で比較検討することを目的に、以下①～⑤といった共通の質問を行った。なお、回答時の関係する事柄については随時追加の質問を行った。

- ①地域との関わり方への考え方や取り組みについて。
- ②教育機関との連携事業について。
- ③博物館との連携について。

- ④長崎県対馬歴史研究センター・対馬博物館の認知度について。
- ⑤開館後見えてきた課題について。

○豊玉町郷土館・峰町歴史民俗資料館の見学

両館は、平成の大合併以前に建設された施設であった。現在は常時開館ではなく、申請で見学できるようになっている。見学者も少なく、展示用具などの老朽化なども目立つ状況だった。

## 研究成果と課題

1の成果については、松尾晋一「書評 上白石実著『十九世紀日本の対外関係：開国という幻想の克服』」（『歴史評論』874号、2023.2）やJICA九州地域理解プログラム「海外に開かれた長崎：過去・現在・未来」での講義などで一部を紹介し、「太平天国の戦況と日本—対馬宗家が得た情報の分析を通じて—」（近刊）としてまとめた。

2については、まず対馬における中核博物館として対馬博物館が他館との関係で十分に機能しきれていないことが確認できた。対馬博物館は人文科学・自然科学の両分野を網羅した展示の総合博物館であるものの、島内各地域の特性を紹介する郷土館などとの連携やすみわけを今後図ることで島内の地域性を活かしつつ教育機関としての役割も果たせると考えられる。この点については、今後の他の事例を参考にしながら対馬で何ができるのか、検証していきたい。

また、上記とも関連するが、探求型授業への対応ができていないことを確認した。各館が「教育プログラム」を組み立てることが急務だと考える。すなわち、島の歴史・文化を素材にすることで、思考力を高める教育を実施していくとともに、島の歴史・文化を理解し、そして後世に繋げる人材の育成に取り組まないと前の世代との断絶が起きかねない。こうならないための仕組みづくりが必要であろう。